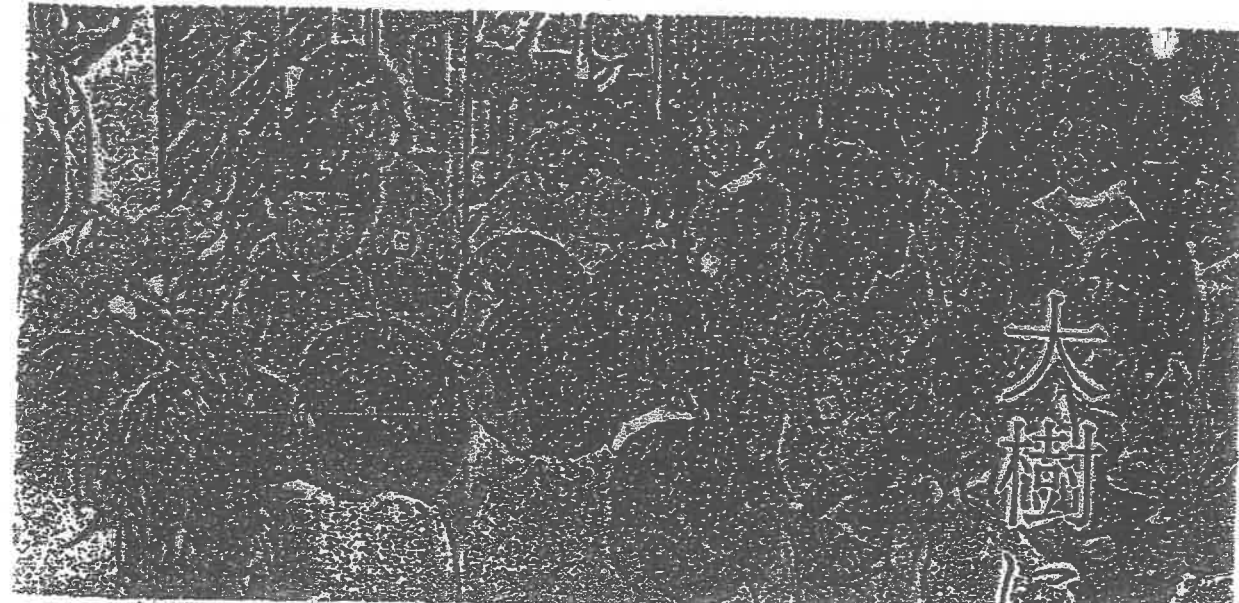


# 大樹に育て



## 教育の原点

習志野市・みのり幼稚園園長

## 田久保 明夫さん

オープン保育——耳慣れない言葉だが、どこか興味をひく響きを持つ。

習志野市の学校法人田久保学園・みのり幼稚園では、このオープン保育をしているという。

どんより曇り、肌ねっとりからみつく生温かい風の吹く四月の末、私はみのり幼稚園に田久保明夫さんを訪ねた。

——オープン保育というのは、どういうものですか。

「一口で言えば、園児一人ひとりの個性を伸ばし、自主性を育てる教育ですね。」

三・四歳の子というのは、発達段階も発育のバランスも、みんな違うんですよ。それを、一日中教室に閉じこめて、画一的な指導をしようとしても、ひずみがでるだけなんです。コンプレックスを持つ子も出てきますよ。それじゃ、幼稚園の存在が、おかしくなりますよね。幼稚園は、いわゆる落ちこぼれの種を播くところじゃないはずですから。

オープン保育というのは、物理的にも開かれた空間で、システムとしても、ノン・グレイディング（無階級的）なものなんです。

そうすると、子供は自分の段階や内面の要求によって行動をできるんですよ。」

さんを知った。以後、毎週一回、亀田さんに習志野に来てもらい、指導をうけている。

昨年までは週二日をオープン保育の日にしていたという。好評なので、四月からは毎日オープン保育に切り替えた。

「切り替えと入園とが重なって、子供達もあんまり落ちついていませんが、どうぞ……」と、園内を案内してくれた。

ストロボのついた大きなカメラを持った私を目ざとく見つけた子が

「あっ！ カメラマンだ。」と、大声を出して皆に知らせる。

「どうやって写すの」「これ、ピカッと光ってバチンとなるんだよね」「ねえ、どこから来たの」「写して、写して」「フィルム見せて」……。

十人ばかりの子が私をとり囲んだ。田久保さんは、ただニコニコと笑って見ている。

照で、この不意の園入者には目もくれずに一心に本を読んでいる子もいる。他にも、トランポリン、粘土細工……。

アコーディオン・カーテンで仕切られたスペースいっぱい子供達が、てんでに躍動している。

泣き、笑い、叫び、歌う。まったくじっとしていない。しかし、それが子供なのだ。田久保さんは笑う。

最初に私を見つけた〇君が案内を買って出てくれた。

隣りに坐っていた二十世紀教育の会・専務理事、亀田佳子さんが話を続けてくれた。「最近は何価値観が多様化してきているでしょ。この子達が大人になる頃は、ますますその傾向が強まりますね。」

そうすると、単に、いう事をよく聞いてもの覚えのいい、いわゆるよい子では対応できない時代になりますよね。

オープン教育で育てられた子は自主性とか創造力がつくんです。これはよその例ですが、オープンをしてる学校が、希望者が多くて途中で普通の子を派山編入させたんです。なる程、彼らは試験をパスしてきた子らだけあって、テストには強いんです。ところが、いざ文化祭のような時になると、計画はたてられない、作業の手筈がわからない、手際が悪い。ただ、もう、オロオロするばかりなんです。ところが、オープンの子は何時までこれを仕上げると、とどシンと計画をたてて仕事をそのとおり運べるんですよ。」

公立の小学校の先生を五年程してから、魅力ある教育を求めて、田久保さんは幼稚園を創立した。大学の先生を講師にお願いして、体育の時間を持つなど、意欲的だった。

そんなある日、田久保さんはヨーロッパに旅をした。そこで、オープン教育を見た。素晴らしい感動だった。帰国後、自分の園でもできないものかと模索を続けた。そして、亀田

現在は週一回、木曜日に行っています。



田久保明夫さん

「ここはね、今、コイノポリを  
作っているんだよ。手でペタペ  
タして。」  
見ると、コイノポリの形に切  
られた白い布に、小さな手形が  
沢山ついている。先生がそれに

一つひとつ名前を書いていく。

「ここでは、みんな、お歌うたっているよ。」  
先生のピアノのまわりに輪になって合唱している。席につ  
いているのではない。床に坐っている。自然な輪だ。

年長のクラスだろうか。外で、水圧の実験をしている一団  
がある。水圧の実験といえば大げさだが、要するに水遊び  
だ。先生も一緒に、嬉々としてやっている。強い風の吹く中  
で、子供達は真剣に先生の手元をみつめている。子供の興味  
に答える先生の態度にひたひきさが感じられた。

階段の下で泣いている子がいた。少し大きな女の子が頭を  
なでてやっている。

「ねえ、つばみの組に行こうよ。」

〇君は私の手を引いて階段を降りて行く。  
四月に入園したばかりのクラスだろう。小さい。〇君が大

きく見える。ドアを開く時、小さな子に注意している。

「危ないよ。オエビはさんじゃうよ。」

たぶん、家ではいつもそう言われているのだろう。〇君の  
先輩よりは堂に入って、ほほえましい。小さい子も素直にい  
う事を聞く。もう帰宅の準備だろうか。帽子をかぶってクツ  
を履いている子がいる。〇君がそれを手伝う。

子供の世界は、自己中心的なものだ。そんな子供達を自由  
に遊ばせておくのだから、先生は大変だろう。

「ウチは園児四百人に対し、職員二十六人だから、ワリに手  
はある方なんです。充分ゆきとどいた教育を、と思うとど  
うしても……ね。」

園長兼理事長の田久保さんが言う。

「私は、教育というのは、子供の内的要求の伸長を手伝う作  
業だと言ってるんです。いい先生というのは、いい案内者の  
事ですよ。」

知識云々というよりは、学ぶという作業の方法を知ってい  
る方が大切じゃないですか。幸い、先生方もよく解ってくれ  
るし、お母さん方が非常に理解してくれるんですよ。」

今、幼稚園に行く子を持つお母さん方といえば、受験戦争  
の初期の洗礼をうけた世代だろうか。そんな父兄が、オーブ  
ン保育に理解を示すという。自分達がうけた画一的な知識備

重教育の反動かも知れない。自分で体験してみなければ解ら  
ない。人間なんて、愚かなものである。

オスカー・ワイルドの痛烈な皮肉を思い出した。◆経験、

つまり人びとが彼等の過去に対してあたえる名称。◆

それでも、まだまだ、有名校志願は減ってない。知識優先  
の◆狂育◆が横行するゆえんである。

知識よりも、その使いの方が重要なのではあるまいか。

知識の多い少ないが人の値うちではな  
いはずだ。単に多くの知識を記憶するだ  
けなら、人間はコンピュータに、はるか  
に及ばない。人間がコンピュータより勝  
れている点は、その多くの知識を活用す  
る点にある。それを知恵と呼ぶのだら  
う。真の知恵を持ってこそ、ヒトは人間  
になる。

オープン保育の究極の目的は、決して  
知識獲得の否定ではない。充分に知識を  
得て、それを活用できる下地作りにあ  
る。答案用紙に使われるだけの知識なら  
意味はない。

ひとまわりして玄関のところに出る  
と、稲葉元文部大臣の横額があった。



◆大樹に育てると。その下では、メガネの女の子が熱心に本  
を読んでいた。小さい子がイタズラをする。女の子は「ダメ」  
と大声で叱った。

自由な活動の中で、自分以外の人格とどう関わっていく  
か。社会性が育まれる好機だ。大人が設定した場でなく、  
子供がナマの生活の中で学ぶ。これこそ、新しい社会に適す  
る能動的な教育とは言えまいか。

みのり幼稚園のオープン保育の歴史  
も、田久保さんも、若々しい。それだ  
け、伸びようとする意欲が感じられる。  
入園希望者が多く、今、第二幼稚園を建  
設中である。

◆オープンの効果がみものには永い年  
月が要する事だろう。人づくりは、野菜の  
促成栽培とは違う。性急に、人目をひく  
著しい効果を期待する事なく、永い目で  
この新しい企画を見守り、育んで欲し  
いものだ。

(取材・高橋)